五臺山佛光寺の唐代の経幢

松浦典弘

序

五臺山佛光寺は山西省忻州市五臺県にあり、臺懐鎮を中心とする五臺山風景名勝区から東南に外れた場所に位置する。五臺山でも有数の古刹であり、大中十一年（八五七）に竣工した東大殿は、現存する数少ない唐代に建立された木造建築の一つである。(1)

佛光寺には数多くの石刻が残されており、史料として極めて貴重である。本稿では二点残されている唐代の経幢を取り上げ、唐代末期の五臺山における仏教の状況について若干の考察を試みることにする。

唐代後半期の藩鎮体制下、各地域において仏教は、節度使による援助や節度使と僧の交遊など、藩鎮勢力の影響を強く受けている例が少なからず存在し、そのことにより地域ごとの特色が見られたりもする。私は河北地域の幽州節度使と仏教の関係について考察したことがあるが、当該地域では會昌の廃仏の影響が少なかったと考えられるなど、独自の展開が見られた。(2) 本稿では、山西地域の藩鎮勢力と五臺山仏教の関係について、経幢の建立にかかわ

った人物を通して検討してみたい。

もう一点、考えてみたいのは、會昌の廃仏とそこからの復興についてである。唐朝第十五代皇帝武宗（在位：八四〇～八四六）による廃仏は仏教界に大きな打撃を与えたとされるが、先にも触れたように地域によりその影響には差が見られ、より詳細に検討する必要がある。二点の経幢はいずれも會昌の廃仏後に建てられたものであるが、当該地域での廃仏後の仏教復興の状況について考察を試みる。

一．唐末までの佛光寺の沿革

まず、創建から唐末に至るまでの佛光寺の歴史を概観しておきたい。特に本稿で検討の中心となる唐代後半期に関しては、藩鎮との関係にも触れながら述べていくことにする。

佛光寺の創建は五世紀末の北魏・孝文帝の時代に遡る。五臺山近く雁門出身である曇鸞が、出家前に訪れとどまった場所であり、この寺で出家を決意したとされているが、[3] これは創建間もない時期のことである。

その後、恐らく北周武帝の廃仏による弾圧を受け荒廃した時期があり、隋に至って復興したものと考えられる。廃仏からの復興の中、唐代初期にかけて解脱という僧が、大きな役割を果たしていた。『古清涼傳』巻上・古今勝跡の佛光寺の部分に、

昔　大隋運を開き、正教重ねて興り、凡そ是れ伽藍、並びに復た修むるを任す有り。時に五臺縣昭果寺解脱禪師、此に於いて終焉の志有り、遂に再び修理を加う。

とあるように、隋建国後の仏教復興に際して昭果寺の解脱が中心となり伽藍の修復にあたったのである。解脱の重修を貞觀七年（六三三）とする史料もあるが、何れにせよ隋代から唐代初期にかけて、佛光寺の運営に尽力してい

たのであろう。[4] また、解脱とともに同じく昭果寺に属していた明曜も佛光寺の重修に貢献していた。[5]

その後、唐代前半期は解脱の法孫にあたる乗方などが活動していたようである。[6] また、天寶四載（七四五）には現在まで残されている無垢浄光塔が建造されている。

安史の乱後の唐代後半期に佛光寺にかかわった僧として先ず名を挙げておきたいのは、洛陽同德寺の無名であり、『宋高僧傳』巻一七・護法篇に立伝されている。それによれば、二十八歳で出家した無名は、洛陽同德寺に配されたが、禅に関心を持つようになり、荷澤寺の神會に師事することになる。師の教えを聞き各地を遊方することを決意し、その足跡は五岳・羅浮山・廬山・天台山・四明山など極めて広範囲に及んだが、貞元六年（七九〇）に至り五臺山入りした。五臺山においては定まった居所はなかったようであり、同九年十二月十二日に佛光寺で臨終を迎え、澤潞節度使の地位にあった李抱真によって佛光寺に塔が建てられた。[7] なお、澤潞節度使は五臺山のある河東節度使の南東に隣接した位置にあり、後出する昭義軍節度使のことである。

無名の事績は、貞元十一年（七九五）五月二十五日に刻され、現在も佛光寺に残される「唐東都同德寺故大方便和尚塔銘幷序」からも知ることができる。[8] この塔銘は弟子である長安資聖寺の慧岌によって著されたものであるが、五臺山入り後、鐵勤寺にいた無名は、河東節度使の李自良（在任は貞元三年～十一年）らの求めに応じ、山を下り恐らく北都太原へ迎えられたようである。[9] 藩鎮体制下、各地の寺院は往々にして藩鎮と結びつき、時としてその援助を受けてきており、仏教を信仰した節度使も間々存在した。五臺山は河東節度使の領域内にあり、その影響は大きく、無名としても李自良の招請を断り切れなかったのであろう。

無名より少し後に佛光寺で活動した僧としては、同じく洛陽出身の法興がいる。この地に来て佛光寺を所属の寺院とした法興は、弥勒大閣の建造などに活躍したようで、山門都綱に充てられ、大和七年（八三三）に逝去した。[10]

なお、この少し後、圓仁が五臺山を訪れる。『入唐求法巡禮行記』にも佛光寺の名は見られるが、円仁自身は佛光寺を訪れることはなかったのではないかと思われる。[11]

その後、武宗による廃仏の影響を被り、五臺山は大きな打撃を受けることになる。武宗は即位以来、仏教への統制を強めていたが、會昌五年（八四五）に弾圧はピークを迎える。七月の詔では各藩鎮には寺は一か所しか残すことは許されず、多くの寺が廃され、僧尼の数は厳しく制限され、寺院財産は没収された。八月にはさらに僧尼の数が減らされて、還俗を強いられる者が数多くいた。五臺山では難を避け隣接する幽州節度使の管内へ逃れようとする者もいたようである。[12]

しかしながら、翌年三月に武宗が逝去し宣宗が即位すると、仏教への政策は大きく転換され、勅命により五臺山の諸寺でも度僧が行われた。[13] 佛光寺も復興を遂げていき、大中十一年（八七七）には現在にまで残る東大殿が完成するのである。

この時期に佛光寺の再建に尽力したのが、願誠である。『宋高僧傳』巻二七・興福篇・唐五臺山佛光寺願誠伝によると、願誠は五臺山の行嚴に師事し、大和三年（八二九）に落髪、同五年に具戒を受ける。會昌の廃仏後、佛光寺で荒廃からの復興に当たっていたが、その美名は宣宗の知るところとなり、紫衣を与えられた。こののち、突厥沙陀部の李氏がこの地を勢力下におくようになると、[14] 五臺山を訪れ、願誠の人品に感じ入り、唐の皇帝に申し入れた結果、大師号「圓相」を賜り、また山門都検校の地位につけられた。光啓三年（八八七）に至り逝去したが、寺の西北一里のところに碑が建てられたという。[15]

唐代末期、長安や洛陽など唐朝の中枢をなした地域は、黄巣の乱により混乱した状況が続いていたが、李氏勢力下にあった山西地方は比較的安定していたと思われる。そうした状況の中で、五臺山も廃仏からある程度の復興を

遂げていったと見てよかろう。

二．経幢

次に経幢とはどのようなものであるか、述べておきたい。

経幢とは仏教経典を刻んだ石柱のことで[16]、まれに四角形や六角形のものも存在するが、通例は八角形である。時期的には八世紀ごろから盛んに作られ、唐から宋・遼・金にかけてのものが多く見られる。佛光寺には本稿で取り上げる唐代の二点とともに、明・正統九年（一四四四）のものが残されている。

経幢は墓に建てられ墓誌的な役割を果たしているものもあるが、多くの場合は何らかの意図を以て建造され寺院に安置される。こうした経幢が歴史史料として貴重であるのは、発願者の名などが記された題記によって、経幢建立の背景や当時の仏教の状況などについての情報を含んでいることである。

さて、仏教経典で刻されることが圧倒的に多いのが、佛陀波利訳『佛頂尊勝陀羅尼經』である。『佛頂尊勝陀羅尼經』は、七日後に命が尽きたのち、畜生や地獄に生まれ苦しみを味わった挙句、人間として貧賤な家に両目のない状態で生まれるであろうと告げられた善住天子が、帝釈天に相談し、帝釈天が釈尊に相談したところ授けられたという経典で、聞き読誦することで一切の業障が取り除かれるというものである。この経典は唐代後半期に流行したのであるが、以上のような内容から見ても経幢に刻まれるにふさわしいものといえよう[17]。

さらに佛陀波利がこの経典を訳した際の逸話も、経幢の題材として好まれた理由の一つである。この逸話は経典に付された志静の序に詳しいが、それにより概要を記しておく[18]。

バラモン僧の佛陀波利は、儀鳳元年（六七六）に中国へやってきて五臺山に出向いた。その地にいるとされる文

殊菩薩の姿を拝さんことを望んでおり、泣きながら山頂に向かって拝礼していた。すると、一人の老人が山中から現れ、「漢の地では衆生は罪業をなすこと多く、出家者は戒律を犯すことが多い。佛頂尊勝陀羅尼だけが衆生の悪行を滅することができるが、なぜそれを持ってきていないのか」と言った。そして、西国へ帰り佛頂尊勝陀羅尼を将来してこの地に流伝させることこそが、遍く衆聖を奉じ、広く群生を利し、幽冥を救い、仏恩に報いることになるので、取りに戻ることを求め、そうすれば文殊菩薩の居所を教えることを約した。佛陀波利は喜んで、西国へ佛頂尊勝陀羅尼を取りに戻り、永淳二年（六八三）には長安に戻り高宗にこのことを申し上げた。高宗はその経を宮中に入れ、日照や杜行顗らに命じて訳させ、佛陀波利には絹三十匹を施し、経本は宮中に入れ出さないこととした。佛陀波利は、はるばる経を取りに行き持ってきたのは、広く流通させ群生を救うためだとして、泣いて頼んだため、翻訳した経本を宮中には残し、梵本は返してやった。佛陀波利はそれを西明寺に持っていき、梵語を解する漢人僧の順貞とともに訳し、訳し終えた後は梵本を持って五臺山へ入り、そのまま出て来ることはなかった。(19)

佛陀波利訳の『佛頂尊勝陀羅尼經』には以上のような背景があり、文殊信仰の霊場として名を馳せていた五臺山とも大変かかわりの深いものであった。佛陀波利が五臺山で霊験あらたかな体験をしたことと、彼が広く人々を救いたいという意志を持っていたことが、佛陀波利訳のものが圧倒的に多く経幢に用いられた理由であろう。

三．佛光寺経幢の題記

次に佛光寺の経幢の題記の検討に移りたい。刻される経典は、二点とも佛陀波利訳『佛頂尊勝陀羅尼經』であり、序文も含めた全文を記している。以下、題記部分のみ全体の録文を記した上で、その内容について検討することにする。

（一）大中十一年経幢（／は改行を示す）

第七面末尾

北都崇福寺都維那釋元□書／

第八面右端

昭義軍勝願寺比丘尼寶嚴先發願於臺山佛光寺造佛頂尊勝陀羅尼石幢一所奉爲　國及法界衆生蠢動含靈證眞常樂及願先亡父母神生淨土／同建造石幢主劍南東川盧州浮義縣高福寺比丘尼寶堦　大中十一年十月廿□建造　攝五臺縣宰盧攝主簿薛　造石幢人汝南翟元開　小拾／

第八面第一段

僧法元　僧法清　僧惠明　僧文宗／

當寺徒衆等　寺主僧惠全　上座僧常照　都維那惠哲／僧守規　文悟　士衡　常榮　善慶　弘莒　契元　法淨　惠淨／頓悟　文紹　從政　佛殿主願誠　從則　從眞　法廣　法初／　弘□　洪操　志道　契微　宗本　幼眞　遇緣　□眞　明義／宗遠　守意　太簡　師簡　惠眞　惠清　德閏　智清　師範／

第八面第二段

丘尼界藏　首信／洪眞　文宗　幽惠／妙元　福慶　貞秀／女弟子佛殿主寧公遇／沙弥　妙喜　妙因／

第八面第三段

施主昭義軍節度使檢校兵部尚書兼御史／大夫賜紫金魚袋畢誠／節度副使檢校金部郎中兼御史中丞賜紫金魚袋源重可節度判官裴誠／節度都押衙潘　馬歩都虞侯高□偃／隨使孔目官韓祐　隨使孔目官朱義／前攝河東節度館驛巡官文林郎前守絳州參軍令狐絳／

第八面第四段

河東節度押衙王彦　前荆南討擊／使侯重遇　絳州押衙李忠信／孔目官張　呉準　男緒郎　榮郎／張曾　韓貞　崔師張元楚　劉元楚／鄭元察　和運　劉峯　韓秀誠　雍仙／劉淑元　曹國用　馬光晏　裴翰　侯頴／陽曲縣録事衛遠李□　翟成　李成／

第八面第五段

施主女弟子□氏　韓氏　牛氏　鄭氏／門氏　周氏　王氏　蘇氏　男都兒　高氏／小女師娘子　王氏　柱哥石頭兒靖□／馮氏　李氏　蓮華藏常歡喜　瞿氏／陳氏　鄭氏　□氏　常氏　温氏　王氏／霍氏　裴氏　孫氏　張氏　霍六武八　武氏／李氏　郭氏　常堅古　段氏　郭氏　小徳□

この経幢は高さ三・二四メートル、現在は東大殿の前に安置されている。大中十一年は廃仏からの復興の中で東大殿が竣工した年であり、同時期に建てられたこの経幢は、復興事業の一環として作成されたものであるとみてよかろう。

経幢の文字を書いたのは、第七面末尾に名が記される太原崇福寺の元□である。太原の崇福寺については、『宋高僧伝』などにもその名が間々見られ、河東節度使治下の中心都市であった太原でも有力な寺院であったと考えられる。聖地として信仰を集め繁栄していた五臺山の復興は一大事業であり、山西地域の人々が幅広く関わっていたことを反映している。

八面からなる経幢の第一面の上方には「奉爲　國／及法界衆／生造佛頂／陀羅尼幢」と記す題額、その下から七面にわたって『佛頂尊勝陀羅尼經』の志静序と経文が刻される。そして最後の第八面が経幢の建立に携わった人物を記した題記になる。

その第八面であるが、右端に石幢を作る中心となった人物の名とその発願動機が二行にわたって記される。経幢造営の中心となったのは、「昭義軍勝願寺比丘尼寶嚴」と「劍南東川盧〔瀘〕州浮〔富〕義縣高福寺比丘尼寶堦」という二人の尼僧である。一行目に、

昭義軍勝願寺比丘尼寶嚴　先に發願し臺山佛光寺に於いて佛頂尊勝陀羅尼石幢一所を造り、奉じて國及び法界衆生・蠢動含靈の爲に常樂を證眞し、及び先亡せし父母の神の淨土に生まれんことを願う。

とあり、二行目に記される寶堦については同建造石幢主とある。昭義軍節度使は、佛光寺のある河東節度使の南東に隣接しており、地域としてはそれほど遠くはない。一方の劍南東川節度使は四川であり、地理的にはかなり離れた場所になる。寶堦が中心となった一人であるのは、五臺山近辺の地域の出身であったか、あるいは巡礼の場として多くの僧俗を集めていた五臺山を訪れたことがありその際につながりができたなどの理由が考えられようが、詳細は明らかにしえない。法名を一字共有していることから、寶嚴と同世代でかつて同じ寺に所属していた可能性もある。

その左側は上方から五段に分割されており、経幢の造営に携わった人々の名が刻される。

最上段には僧の名が記されるが、最初の行の僧法元以下四名は佛光寺の僧ではないと見られる。行を改めて「當寺徒衆等」として記されるのが、当時、佛光寺に所属していた僧たちである。寺院の運営の中心となった寺主・上座・都維那の三綱以下、計三十八名の僧の名が刻される。中央付近には佛殿主である願誠の名が記されており、復興事業の中心となっていたことが分かる。

二段目に記されるのは、まずは尼僧であり、比丘尼の比の字が落ちているが、界藏以下、六人の名が刻されている。次いで女弟子すなわち在家女性信者の佛殿主寧公遇の名が刻されるが、彼女の名は東大殿の梁架の題記にも見られる。そこには「佛弟子上都送供女弟子寧公遇」とあり、上都すなわち長安の人で佛光寺へと布施を送っていた。この経幢にも佛殿主とあることから、相当額の布施を送っていたことが推測される。

次いで三段目に節度使の畢誠をはじめとする昭義軍藩鎮の官が名を連ねるが、これについては後述したい。

以下、四段目には下級の幕職官や地方官、俗人男性といった三段目に比べ社会的階層の低い男性信者が刻される。河東節度押衙は五臺山があった河東節度使の下級の幕職官、絳州押衙・陽曲縣録事は周辺藩鎮配下の州県の下級の官である。最後に、五段目には主に俗人女性の信者の名が記されている。

以上が、題記の大まかな構成であるが、そこから分かることの一つは周辺の藩鎮が経幢の造営に深く関わっていることである。

昭義軍節度使では、施主として節度使の畢誠の名が挙げられているほか[20]、節度副使源重可・節度判官裴誠らの名が見られ、藩鎮をあげて佛光寺の復興に協力していた状況が分かる。昭義軍節度使は五臺山のある河東節度使に隣接しており、地理的にそれほど遠くもないことから、五臺山の復興に大きく関わっていたと考えてよかろう。佛光

寺に無名の塔を澤潞（昭義軍）節度使である李抱真が建てたことは先述したとおりであるが、そのことからも昭義軍節度使と五臺山のつながりが窺われる。また、この経幢を作ることを発願した比丘尼寶嚴は昭義軍の尼寺の所属であったことも、昭義軍節度使からの援助と関係しているかもしれない。なお、畢誠はこの年の十一月には河東節度使に転じている。

佛光寺の復興と河東節度使との関係については、東大殿の梁架の題記に「敕河東節度觀察處等使檢校部工尚書兼御史大夫鄭　功德使敕河東監軍使元」と記されていることから、東大殿の建立に際して援助をしていたことが分かる。ここに登場する節度使の鄭とは鄭涓のことで[21]、河東節度使の在任期間は大中九年の九月から十年にかけてであるから、まさに東大殿の建設途上である。

このように佛光寺の復興には、五臺山を領域に含む河東節度使のほか、隣接する昭義軍節度使からも多大の援助を得ていたのである。信仰を集めた一大聖地である五臺山の復興には、これ以外の周辺の藩鎮が関与していたことも十分にありうる。

なお、昭義軍節度判官として名の挙がる裴誠は、崇仏で知られる河東裴氏の可能性が高い。『新唐書』巻七一上・宰相世系表には宰相も務めた裴度の子として裴誠の名が見られる。「誠」と「誠」の字形が似ていることから混同されている可能性もあるし、少なくとも排行を同じくする者であると考えてよいのではないか[22]。また、絳州参軍の令狐絳は宰相を務めていた令狐綯と排行を同じくする者であると考えられる。令狐綯の父でありやはり宰相を務めた令狐楚は、貞元～元和年間にかけて河東節度使の元で幕職官を務め、大和六年から七年にかけて河東節度使を務めており、山西地方とは縁が深かった[23]。この地域にかかわりのあった有力者が、佛光寺の復興にも関与していたのである。

地域的に見れば、少数ながら五臺山周辺地域以外の人物の名も見られる。先にも触れたように、経幢を造る中心となった一人の比丘尼寳堦は劍南東川節度使管下の瀘州富義県の寺院に属しており、女弟子の寧公遇が長安の人であったことは梁架の題記から分かる。廃仏からの復興に際して、広範に援助を得ていたのであろう。

階層的な点から見ても、僧俗双方から、また節度使から庶人に至るまで幅広く復興にかかわっていたのである。

（二）乾符四年経幢（／は改行を示す）

第六面三行目途中より

唐乾符四年歳次丁酉七月庚子十九日　戊午建造立畢　都料高懐譲　男宗信鐫字　將士田宗□／

助修幢　尼宿因　尼法因　尼法嚴　施主女弟子李氏郡君靈察　女弟子康氏　女弟子游氏　弟子□□眞常夕晟／

第七面

功徳主山門都檢校賜紫沙門願誠　書幢前寺主講法花弥陀等經比丘宗胤　郾城大供養主僧道政／老宿沙門頓悟　僧縁眞　僧宗遠　從大徳僧弘敬　僧文興　前寺主僧道圓　前上座僧玄縵　前上座僧太簡　僧道因　僧敬通　僧會源　僧惠深　僧元鋭　僧志行　僧文則　僧智類　僧智虔　僧志通　僧志遷　僧又眞／僧南濟　僧継詞　前上座趙家院主僧懷通　前供養主僧敬眞　僧惠明　僧師惠　僧元□　僧惠通　□□□主僧道開　僧行滿　前寺主僧宗禮　前寺主僧弘女　僧文恭　僧行立　僧行幽／寺主僧師簡　上座兼供養主僧弘演　都維那僧志譚　幢都維那僧惠遷　大庫典座僧惠

審　僧弘謹　僧法進

この経幢の寸法は大中経幢を大きく上回り、高さは四・九メートル、現存する経幢の中でもかなり大きな部類に属する。現在は奥の東大殿に通じる参道の傍らに位置する。

拓本写真によれば、七面にわたって文字が記されている。残りの一面の写真を掲載していないが、恐らく文字が刻されていないのであろう。

志静の序と経文が第一面から第六面の三行目に至るまで記され、それに続けて三行目途中から、本稿掲載の録文の冒頭へとつながる。第六面中央には経幢の建立を助けた尼僧の名と、施主である女性在家信者の名が刻されている。

第七面に僧の名が刻される。この経幢に名を連ねるのは、多くが当時佛光寺に所属していたと考えられる僧侶である。そのうち功徳主として筆頭に名のある山門都檢校賜紫沙門の願誠は大中経幢にも名が見られ、廃仏後の復興において中心的な役割を担っていた人物である。以下、計四十五名の僧の名が刻されている。

願誠以外にも頓悟・師簡・太簡・宗遠・惠明の名が、大中・乾符の両方の経幢に見られ、それぞれ同一人物であると考えられる。頓悟は老宿沙門、師簡は寺主、太簡は前上座と記されている。彼らは、大中経幢の建立から二十年の間、佛光寺において主要な役割を果たし続けてきたのであろう。

第七面に刻される僧の中で、道政については郾城大供養主と付される。郾城は河南道でも南方に位置する許州に属する県の名で五臺山からはかなり離れた場所になる。この面に刻される僧はほとんどが佛光寺の者であると思われるが、佛光寺に属しているが出身地の関係で記されているのか、或いは佛光寺に属していないが巡礼などでこの

地を訪れていたのか、詳細は不明である。

この経幢に関しては、尼僧や俗人女性信者も名を連ねているが、大中経幢と比較すれば、佛光寺の僧が占める割合が圧倒的に大きくなっている。大中経幢には節度使以下、幕職官が名を連ねていたが、こちらは藩鎮勢力との関わりは見られない。また、地域的にも他地域への広がりが窺われる要素が少ない。

そうした点からは、この時期までには佛光寺は大規模な経幢が建てられるほどに、復興が進んでいたことが推測される。もちろん地域社会の援助もあったことであろう。特に復興の中心となっていた願誠は、当時、山西地方を勢力下に置いていた突厥沙陀部の李氏との関係も深かったようであることから、その援助があったことは十分に考えられる。

乾符四年といえば、中原においては黄巣の乱が拡大しており、都長安も混乱した状況にあった。大中経幢においては、題記に名を連ねる人物に地域的な広がりが見られ、長安の施主からの援助もあったのに対して、乾符経幢にそれが見られないのは、そうした社会状況も影響しているであろう。

小　結

これまで見てきたように、佛光寺は會昌の廃仏により大きな被害を受けたようであるが、大中年間の仏教復興政策の中で復興を遂げていった。そこには河東節度使や昭義軍節度使など藩鎮勢力をはじめとする多くの援助があったことが、本稿で扱った経幢などから窺われる。唐代末期、長安や洛陽など中央が混乱状態にあった時期でも、山西地方は比較的安定した状況にあったと見られ、佛光寺も巨大な経幢の建造が可能であるほどの勢力を持つまでに復興していたのである。

五臺山全体も廃仏前ほどではないにせよ、徐々に寺院も修復され賑わいを取り戻していったようである。佛光寺も含めた五臺山の状況は、有名な敦煌莫高窟第六十一窟の壁画「五臺山図」からも窺われるが、これが描かれたのは五代中期であるとされている。[24] 宋代になっても五臺山は信仰の場としての賑わいを見せているが、唐末の段階である程度の復興はなされていたのである。

藩鎮が仏教にもたらした影響や、會昌の廃仏後の仏教に関しては、地域差を考慮した上で、さらなる検討が必要とされるが、今後の課題としたい。

註

（1） 佛光寺については張映瑩・李彦主編『五台山佛光寺』（文物出版社　二〇一〇年）が詳しい。本書は建築・歴史など佛光寺について幅広く取り扱っている。石刻に関しても、拓本写真に加え、誤りも散見されるが録文が掲載されている。本稿で作成した経幢の録文は、主に本書の拓本写真によった。また、東大殿については、清華大学建築設計研究院・北京清華城市規劃設計研究院文化遺産保護研究所編『佛光寺東大殿建築勘察研究報告』（文物出版社　二〇一一年）があり、梁架（はり）に記された題記の写真など参考になった。

（2） 拙稿「唐代河北地域の藩鎮と仏教―幽州（盧龍軍）節度使を中心に―」（『大手前大学論集』第一〇号　二〇一〇年）

（3） 『古清涼傳』巻上「元魏沙門釋曇鸞、本雁門高族、在俗之日、曾止其寺、結草爲庵、心祈真境、既而備覩聖賢、因即出家。其地、即鸞公所止之處也。後人廣其遺址、重立寺焉。」『續高僧傳』巻六・義解篇二・魏西河石壁谷玄中寺釋曇鸞伝によれば、曇鸞は「未志学」即ち十五歳にならないうちに出家しており、逝去は東魏・興和四年（五四二）六十七歳の時のことであるから、その出家は四九〇年以前のことになろう。

（4） 『續高僧傳』巻二二・習禅篇六・唐代州照果寺解脱伝には「復住五臺縣照果寺、隱五臺南佛光山寺四十餘年。今猶故堂十餘見在。……四十餘年、常在佛光。永徽中卒。今靈軀尚在、嶷然坐定在山窟中。」とある。

（5） 『古清涼傳』巻下・遊靈感通の釋明曜の項には「曜住昭果寺、常誦法華、讀華嚴經、每作佛光等觀。曾同與解脱、俱至大孚寺、祈請文殊師利。」とある。前掲注（4）『續高僧傳』解脱伝にも、当時百六歳であった高行沙門の曜が五十歳の時に解脱

とともに大孚靈鷲寺で文殊にまみえた逸話が記されている。

（6）『廣清涼傳』巻下・高德僧事跡。『宋高僧傳』では巻二六・興福篇に立伝されるが、五臺山昭果寺の業方としている。

（7）「至貞元六年、往遊五臺、居無定所。九年十二月十二日、於佛光寺、先食訖、儼然坐化、春秋七十二、臘四十三。十一年、闍維、獲舍利一升。澤潞節度使李抱真建塔於佛光寺、貞元六年庚午歳也。」通例であれば、火葬にしたのちに舎利を得、そのために塔を建てたとするのが妥当であるし、舎利を得たのちに塔を建てたように読めるのだが、逝去が貞元九年、荼毘に付したのが同十一年で、塔を建てたのが同六年とあり、順番が前後する。貞元六年は無名が五臺山入りした年なので、その後すぐに塔を建てたということなのであろうか。李抱真が貞元十年六月一日に六十二歳で逝去していることからも、十一年の火葬ののちに塔を建てたというのは合わない。ただ、後述する無名の塔銘は十一年に作成されたものであり、火葬にした年と一致するので、これとは別に李抱真が塔を建てていたのかもしれない。李抱真については、『舊唐書』巻一三二・『新唐書』巻一三八の本伝の他、穆員撰「相國義陽郡王李公墓誌銘」（『文苑英華』巻九三七）が詳しい。節度使着任は大暦十一年（七七六）十二月のことであり、十八年の長きにわたって節度使の地位にあった。なお、以下、節度使の在任期間に関しては、呉廷燮『唐方鎮年表』及び王寿南『唐代藩鎮与中央関係之研究』（大化書局　一九七八年）附録一・唐代藩鎮総表による。

（8）註（1）『五台山佛光寺』二三二～二三四頁に掲載される。

（9）「河東節度使李公自良・都虞侯張公瑤願開浮雲、得見明月、手扎書疏遣使于五、師以佛法付囑王臣、辭讓不獲、杖策出山。元戎親擁旌旄、備列華蓋、郊迎野送、意傳香火。」

（10）『宋高僧傳』巻二七・興福篇・唐五臺山佛光寺法興伝「唐釋法興、洛京人也。……來尋聖跡、樂止林泉、隷名佛光寺。節操孤頴所霑利物。身不主持付屬門人。即修功德、建三層七間彌勒大閣、高九十五尺、尊像七十二位、聖賢八大龍王、罄從嚴飾。臺山海眾異舌同辭、請充山門都焉。蓋從其統攝、規範準繩、和暢無爭故也。大和二年春正月、聞空有聲云、『入滅時至、兜率天眾今來迎導。』於是洗浴梵香、端坐入滅。建塔于寺西北一里所。」『廣清涼傳』は巻下・高德僧事跡に同様の内容を記し、「山門都」ではなく「山門都綱」とするが、こちらの方が正しいであろう。

（11）『入唐求法巡禮行記』巻三・開成四年（八三九）七月四日条には、「齋後、向西南入谷逾嶺、行十五里到大暦法花寺。」と記した後、大暦法花寺の様子を詳しく記し、佛光寺については同日条末尾に「從法花寺西北十五里有佛光寺。」とある。また、翌五日条には、「齋後、西南行二里、到上房普通院宿。」とあるのみである。恐らく法花寺の近隣に名刹である佛光寺があることを記したのみで、立ち寄ることはなく上房普通院に向かったのであろう。

（12）『資治通鑑』巻二四八・會昌五年七月丙午条に「上惡僧尼耗蠹天下、欲去之、道士趙歸真等復勸之。乃先毀山野招提・蘭若、

至是、敕上都・東都兩街各留二寺、每寺留僧三十人、天下節度・觀察使治所及同・華・商・汝州各留一寺、分為三等、上等留僧二十人、中等留十人、下等五人。餘僧及尼並大秦穆護・祆僧皆勒歸俗。寺非應留者、立期令所在毀撤、仍遣御史分道督之。財貨田産並沒官、寺材以葺公廨驛捨、銅像・鐘磬以鑄錢。」とある。『考異』に引用される『武宗實録』によると河東節度使は中等にあたる。さらに、同上・會昌五年八月壬午条には、「詔陳釋教之弊、宣告中外。凡天下所毀寺四千六百餘區、歸俗僧尼二十六萬五百人、大秦穆護・祆僧二千餘人、毀招提・蘭若四萬餘區。收良田數千萬頃、奴婢十五萬人。所留僧皆隷主客、不隷祠部。百官奉表稱賀。尋又詔東都止留僧二十人、諸道留二十人者減其半、留十人者減三人、留五人者更不留。五臺僧多亡奔幽州。李德裕召進奏官謂曰、『汝趣白本使、五臺僧為將必不如幽州將、為卒必不如幽州卒、何為虛取容納之名、染於人口。獨不見近日劉從諫招聚無算閒人、竟有保益。』（幽州節度使）張仲武乃封二刀付居庸關曰、『游僧入境則斬之。』」とある。なお、幽州においては廃仏が徹底して行われなかったであろうと考えられることは、註（2）の拙稿参照。

（13）『宋高僧傳』巻二七・興福篇・唐五臺山智顗伝「未逾歳載、宣宗即位、勅五臺諸寺度僧五十人、宣供衣帔、山門再辟。顗爲十寺僧長、兼山門都修造供養主。」また、『文苑英華』巻四二二・翰林制詔・大中二年正月三日冊尊號赦書がここにいう勅であるが、仏教復興に関しても詳細に記す。五臺山に関しては、「五臺山置寺五所、如有見存寺、便令脩飾充寺、每數度五十人、數内置尼寺一所。」とある。

（14）この時期の沙陀族と仏教の関係については、中田美絵「沙陀と仏教―後唐建国までを中心に―」（科研費研究成果報告書『ソグド人の東方活動に関する基礎的研究』研究代表者：森部豊　二〇一三年）がある。

（15）「會昌中、隨例停留、唯誠志不動搖。及大中、再崇釋氏、選定僧員。誠獨為首矣。遂乃重尋佛光寺。已從荒頓。發心次第新成。美聲洋洋聞於帝聽。飈馳聖旨雲降紫衣。後李氏奄有幷門、遐奉文殊、躬遊聖地。覩其令範、撫手愜懷、表聞唐天子、相繼乃賜大師號圓相也、就加山門都檢校。光啓三載、羞饌命僧、捨衣投施。鐘聲引衆、悉至齋堂、右脇曲肱、寂然長往。建塔樹碑寺之西北一里也。」

（16）わが国における経幢の研究としては、古くは松本文三郎『支那仏教遺物』（大鐙閣　一九一九年）で経幢が取り上げられている。近年のものでは、『佛頂尊勝陀羅尼經』に対する関心からの研究である佐々木大樹「仏頂尊勝陀羅尼経幢の研究」（『智山學報』第五八輯　二〇〇八年）が『石刻史料新編』所掲の仏頂尊勝陀羅尼経幢を網羅しており、参考になる。また、経幢全般の研究としては、劉淑芬『滅罪与度亡―仏頂尊勝佗羅尼経幢之研究』（上海古籍出版社　二〇〇八年）がある。

（17）『佛頂尊勝陀羅尼經』の流行に関しては、林韻柔「唐代《佛頂尊勝陀羅尼經》的譯傳與信仰」（『法鼓佛學學報』第三期　二〇〇八年）が詳しい。

（18）『宋高僧傳』巻二・訳経篇・唐五臺山佛陀波利伝は、同様の内容を記すが、志静の序をもとにして書かれたものであろう。

（19）大正蔵第一九冊・三四九頁・中段～下段。佐々木大樹「仏頂尊勝陀羅尼の研究―特に仏陀波利の取経伝説を中心として―」（『大正大学大学院研究論集』第三三巻　二〇〇九年）が参考になる。

（20）畢諴については、『舊唐書』巻一七七・『新唐書』巻一八三に立伝される。

（21）鄭涓については、新舊唐書に立伝されておらず、詳細は不明である。

（22）『雲溪友議』巻下・温裴黜には「裴郎中諴、晉國公（裴度）次子也。」とある。なお、『舊唐書』巻一七〇・裴度伝には「有子五人、識・譔・讓・諗・議。」とあり、諴の名は見られないが、少なくとも度の子らと排行を同じくする者であると考えても差し支えはないだろう。

（23）『舊唐書』巻一七二・令狐楚伝「父承簡、太原府功曹。家世儒素。楚兒童時已學屬文、弱冠應進士、貞元七年登第。桂管觀察使王拱愛其才、欲以禮辟召、懼楚不從、乃先聞奏而後致聘。楚以父掾太原、有庭闈之戀、又感拱厚意、登第後徑往桂林謝拱。不預宴遊、乞歸奉養、即還太原、人皆義之。李説・嚴綬・鄭儋相繼鎮太原、高其行義、皆辟爲從事。自掌書記至節度判官、歴殿中侍御史。……〔大和〕六年（八三二）二月、改太原尹・北都留守・河東節度等使。楚久在幷州、練其風俗、因人所利而利之、雖屬歳旱、人無轉徙。楚始自書生、隨計成名、皆在太原、實如故里。及是秉旄作鎮、邑老歡迎。楚綏撫有方、軍民胥悅。七年六月、入爲吏部尚書、仍檢校右僕射。」

（24）日比野丈夫「敦煌の五臺山圖について」（『佛教藝術』三四号　一九五八年　のち『中国歴史地理研究』同朋舎　一九七七年）

付　記

本研究は、科学研究費助成事業「隋唐「仏教社会」の多元的構造の解明と東アジア文化論の構築」（研究課題番号16H03490　研究代表者：氣賀澤保規）による研究の一部である。

（大谷大学准教授　東洋史（中国中世史））

〈キーワード〉藩鎮、廃仏、石刻